赤インキ物語

泉鏡花作

またかとのたまふ迄も化物語。彌生町に居たAさん、過般白山に引越したる、其三日めなりしと思ふ。午後の四時半頃なり。

本郷の家主が宅に用ありて行きし歸途、薄寒くはあり、雨は降る、獨身者だから定めし淋しがつて居るであらう、ドレこのあでやかなる顔を見せて、喜ばせてやらうものと、駒込へ出て白山の背後にまはり、玄關口から女の跫音を學びてしとやかに入りしに、内に居る學生の取次は待たうとせず、御主人自分で出迎へしが、顔を見ると、何だ大塚の、といつたばかり、別に珍しいといふ色もせず、降るね、と言つて長火鉢の前へ差向ひになつたまでは無難なりしが、足の裏の汚い奴は玄關から追返して、決して以て敷かせないといふ条件づきの紫縮緬の蒲團を出して、まあ敷きたまへ、何うだ情婦は出來るかいと、清躯鶴の如き、しなやかな、否すこやかな手で上げて、この柔なる背を叩かれ、雨天にしみ／＼くと感じたのが、薄どろになるはじまりなり。

見たまへ、此内の様子といふのを、こゝが四疊半で、鄰が八疊で、玄關が二疊で、彼方が六　疊で、三疊のまた三疊、内井戸で、水がよくツて、湯殿があつて、見晴は此通りと、むかうの大乗寺の境内から白山の谷へかけて、柳櫻の緑紅、桃もまだ散らず、山吹も咲きはじめ、青々とある木の間に、池が見えて、鳥が浮くのを、我ものらしく指しながら、ソレこれを無類といふ。

いまにまたアレを奉る●●といふわけになると、この敷居から三尺八寸といふ工合に手をついて、おや若旦那入らつしやい、おうツたうしうございますことね、だらう、君なんぞはあやかりもんだと、疊みかけ／＼、例の如く鷲の羽で机の上を掃きながら、まづ原町までは俺だらうゝと憎らしく澄ましたものなり。

我輩堪へかねてボンとはたき、見てくれ、この容子を、この鐵砲張をトやる工合を、よ、ソレこれを無類と言ふ。

御貴殿に至りては、伊勢新の煙草入に銀煙管を持つて居る處はいゝが、五匁の玉を一週間にめしあがらうと言ふ、あはれ不便のもので、ソレをまた銜へた恰好は、宛としてこれ唐茄子に手裡劍ぢやあないか、バイレイトを何と、吸口につけて喫まうといふ身で、大きな口を利きなさんな。

まあさ、世の中にや剪刀でもつて切目正しくキングを五ツに切つて長煙管のさきへつけて呑むのがあるしさ、コンナコンナ風に口を捻つたゴムの煙草入の中へフラグラントを詰めながら持つてあるいて、女の兒の前で悠々と卷いて居る輩もあり、口を煙管に引張られて火鉢の上へ頤を突出すのもあれば、ばく／＼と一服してフハ／＼いきをせいて咽るのもある、煙草の捻り方、煙管の持ち方、吸ひ方、呑み方、拂き方、キツカケ煙草、落着煙草、附合たばこ、持たせ煙草、じらし煙草、御馳走煙草、おさき煙草、其事ならお聞きなさい。

米屋よりも借の多い煙草屋に知己を持つたのは蓋し先づ僕だらう。口惜くばあひてにおなり。

亡くなつた一葉はゝ女詩人の號を奉られた人だが、あれで煙草さへ呑んでくれたらと、喟然として歎ずると、Aさん俯向いて兩手を擧げ、團州に少し似た聲で、イヤ、分つたよ。

何うも心細い男だな、可いからお茶をおあがり、いまにうどんでも差上げるから、もう少しおれン許を聞いてくれ。一體宅といふものは、トこゝで本讀の臺辭あり。

女に口説かれると一般、我輩聞きつけて居るから一向耳にはかけざれど、机から茶棚を褒め、茶棚から吸子を譽め、吸子から茶を褒めて、すぐ食物の自慢をはじめ、おれが内では比目魚を煮るのに、味醂と醤油を半々だ、蓋し旨いよ、盡く食べられるね、君も專ら御修行なさい、と言ひながら、例の通り刷毛の尖で長火鉢の縁を撫でゝ、灰を落しつゝあるかと思へば、直に肘をついて天井を睨めまはし、背後を望め、前を眺め、右に眼を着け、左を視遣り、うつむいて疊を見て、イヤ盡く氣に入つた。

専ら譽めてくれ、蓋し妙と、夢中になる顔を斜めに覗いて、蓋し其蓋し次手だから聞きますが、家賃は幾干だね、と問はれて、チヨイと行詰りしが、そこは年配で少しも拔からず。

此處はね、家主が鷹揚で、一向つまらないことに頓着はしない、イヤ井戸替は月番持で、大屋から半金出す、後は長屋中を集めて日傭が三人綱曳に皆な出ろ、出ないものは五錢出せ、あまつたのでオヤツだ、なぞといふケチなんぢやあない。

奏任官で從何位といふ持主だから、垣根が破れてますが、宜しい、井戸流が支へてますが、宜しい、溝板が撥ねましたが、宜しい。

今日はお天氣が、宜しいと言ふ風だもの、何、家賃の如き聊な。宜しい、其處で易いと言ふのなんだね、分つたよ、なるほど立派だ。

盡く氣に入つた、蓋し妙と、家賃を聞いてから忽ち感心して、専ら譽めながらフト見ると、主人新調

の袷が下に、中形の浴衣を襲ねて居たので、思はず、思ひ出したるは、今より三年ばかり前とぞ覺ゆる、やゝ朝寒となりし頃、横寺町にて夜更のことなり。

宵の口に川柳を見ると品川のに、

<

品川の衣桁股引などもかけ
帆柱がなどゝ初會をあやして居

なんどあるなかに曰く

野暮と怪物品川に入亂れ

といふのに到つて、はてな、箱根から此方には居ないはずだが、此様子では怪しいぜと、はじめ江戸には無いものにして、すべて幽靈と言ひますのは佛家で食ひます青鷺の吸物です、亡者と申しますのは、海豚の刺身でございます、何のお歯黒ベツたりだツて恐いことはございません、老年が總義歯を致したのでと、高慢な講釋をいつて、お女中方に聞かせて居た論法少し怪しくなり、這奴、惡くすると故郷で知己の妖怪どもが、新橋まで汽車で來てアレから馬

車に乗つて入り込むかも知れないぜ、おらさ國さにやあいろんな恐いことがあつたればと、狸やら、獺やら、犬に翼の生えたのやらで、幼いからおどされて、蒲容柳質、至極お人柄で臆病な處がお人柄だと、猜まぬ者は噂する我輩少し弱くなりぬ。

弱くなると、「今の舌は轆轤首でおざりいす」

などゝいふのにばかりであひ、コイツ柳樽とした

ことが野暮らしいと、秀句を吐いて傍へやり、手近の随筆、名は今忘れなれ、中本の茶表紙で、三册もの

なりしを取つて開くと、のツけら食うたり。

山の怪　（と標題を置いて）

去る處に、國の太守山狩したまはむとて、伴あまた從へて夜半に出たまひ、朝まだき麓に着き給ひけるが、何の用意もし給はず、其まゝ山路に懸らせたまふ。頂のくらきなかに、何とも分らぬものゝ聲ありて、申の年の申の月の申の日に猿を殺せし殿はいまいづくにぞ。

一種言ふべからざる感起り、卷を伏せて俯向きしに、戸外を遙に酒井のあたりを、人の跫音聞えたり。

牛込の御前が格子戸の前で聞ゆる、カラコロといふ音は、少しも妖物の氣勢がせず、御前といつて格子戸も、をかしなるものなり、格子戸といつて御前もをかし、これは矢來の殿様のことではなく、神樂町のBさんなり。

知つた方は御存じなるべし、畝織の三ツ紋着で、りうと座に直ると、皆の衆、御禮をと言ふ聲が懸るをキツカケに、パラ／＼と撒くに因つて、この稱あ

りと讀みたまへ。

目下子の刻過より、彼處の前で聞ゆるのは、松葉とやら、常磐とやら、めでた／＼の若松さまや、末よしなどいふ處へ出たり入つたりの裾捌き、至極身に染るといふ説もあれど、此のゾツとするは其ゾツとするゾツとにあらず、あのゾツとは今思つてもゾツとする、酒井の邸の前あたりを、人の跫音聞えしまゝ、餘計なことまで思ひしは、市内牛込區矢來町に、（イワシコ）といふばけもの住みて、丑の刻より寅のあびだを往來することなりけり。

中の丸に住んで居る柳浪氏なぞは名代の夜更しゆゑ、この（イワシコ）にはお知己にて、昨夜もまた行つたヨと、言はるゝこと度々なり。

また逢つたヨと言はないで行つたヨとある處に、ばけものゝ趣味があると、自分で註を入れるに及ばず、あやしのものゆゑ姿は見えず、唯霜がれの月の夜更、朧月の眞夜中を、天とも地とも分たぬ處、矢來の中に悲しい聲の澄み切つた細い調子で（イワ

シコ）　とあとを引つばり、三聲呼ぶと聞えずなるが、うつかりした時なんぞは、ツイ戸の外の四角で、密とも沙汰せず唐突に行ることなるよし。

又行つたよと言ふことは、其時をこそ言ふなりけれ、で今夜あたりは何うだらうと、我輩恐いこと一方ならず。

氣が滅入る、と魔がさして、凡夫ならば一盃のんで繰出さうといふ處を、生れ得ての賢人なれば、たゞまじ／＼と畏り、無上に親たちが戀しくなつて、いよ／＼ふさぎ、眼を塞ぎ、耳を塞ぎて聞えるな、おイワシコ様が聞えるなと、奉つて遠ざけながら、眠氣はちつともさゝうとせず、ます／＼魔がさすといろんな氣懸り、隣の寺は奥座敷で和尚が縊殺されたといふ、三年目にあたつてるぜ、道理で垣隣の内の廁ぢやあ、變な跫音が聞えると、女中たちが恐れて居た。

其上天井で青大將の臭氣がするといふ説もあり、此間二階の窓へ傳はつた守宮を叩きのめして、瓦屋

根へはふり出したのが昨日まで動かないで居て、棄てようと思つて竹で挾むと、ピリ／＼と動いて眼をあけたが、あれは恐らく容易でないぞ。

月のはじめの東雲にも、蟇七ツといふもの、数珠繋にして生捉つて、穴を掘つて中へ入れ、上に蓋をして置きしが、三日めに一ツも殘らず、昇天したか、潜つたかゝ何處へか消えてなくなつたを、盛んなれば祟なしで、ものゝ數ともしなかつたが、アゝ落目になれば變なわけなり。

それもこれも氣にかゝりて、蒼くなつたる耳許へ故いがガタと鼠の音、シヤ！　迷うたかと起直り、腕を組んでキツとなりしが、思ひ着いたる事こそあれ、毒を以て毒を制すで、可いわ、モ一ツ上を越した凄いもので膽を錬らうと、我輩こゝに於て種彦の淺間ケ嶽面影草紙といふ處を、礫川版の名著集で繙いて、時鳥を殺す處へほつ／＼と讀み到り、いつもながら酷いことをと、煙管を探すと見當らず、そりやこそな魔が隠したぞ、いまこゝに置いた筈と、變な氣で上を見ると、御譜代の鐵砲張が本箱の上に乗つて居

るに、ギヨツとして、名にしおふ煙草通も此時ばかりは天狗が言はれず、持方も、取方も、流儀なしに手を伸ばして、取らうとしたりし拍子なり、指がさはつて直傍なりし赤インキの瓶を倒すと、うつむけに下に落ち、疊んで置いたる洗ひたての白地の浴衣の上になりて、どぶ／＼と溢るゝにぞ、吃驚して瓶を取のけ、ト見れば朱に染りたり。

コハ何とせん悲しやで、手に取つて、打返し見て蒼くなりぬ。

といふは、別のことにはあらず。いかゞの拍子か四ツに疊みし、上下を打通して、恰もあつらへたるかの如く、時鳥がなぶり斬にやられたさうな、アスコと、モ一處べつたりとしたのり紅なりしに、思はずアツといつて抛り出し、飛退いて隅へ寄り、洋燈を隔てゝ見詰めしまゝ、夜のあくるをぞ待ちかねたる。

其後寢ざめの惡かりしが、日に月に酒を飲みて、怪物に遠ざかりしにぞ、我輩大に強くなり、然せる

ことは西の海へさらりと忘れて居たりし處、つい五六日あと、Bさんの許を訪ひたるに、御前、燈下に机に對して、（新著月刊）の校正をして居ながら、近來出來ますか、ト此處も同じやうなこと。

忙しい癖に氣が多いな、其儀ならば容赦すまじと、我輩件の煙管を拔いて、手際よく一服吸ひつゝ、御前、御前しかのたまふ君は、出來ますか、いえ、ぐツとのんで、ぢつとこたへて、ふツと吹くといふのが出來ますか。

何ういたして、麝香入の細卷で桐の箱詰といふのを、眉を顰めてめしあがつて、あなたや、のぼせますからおよしなさい、といはるゝ方にはと皆までは饒舌らせず、莞爾笑つて向直り、撲るヨ　（これは癖）　と、筆を持つた手を上げたる機みにインキ壺を引くりかへすと、これがまた校正用の赤色インキで、疊の上にポタ／＼／＼。

おや、其といふ内に、令妹うつくしく奥より出でゝ、無事に始末はつけられたが、此方は久しぶりで思ひ

出し、昔の情婦に逢つたやうに、いゝ心持はせざりしを、今また爰に、ト恐しく長いけれど、サハラの大沙漠の眞中で、一服の煙草と、一國の美人と、孰方が可いと言つて見たまへ。

其時美人を見も返らず、煙草を喫むのは己だらうと、煙草のたとへに沙漠を出すほど、遠き慮り身とて、氣の着くことおびたゞしく、いまAさんが浴衣を襲ねて居たるを見て、さそくに胸に思つたのが、この長々しき間のことなり。

折から勝手口に今日はと、高らかに呼ぶものあり。主人きゝつけて、ばあやは居らぬのかな、アノ聲を聞いてくれ、威勢が可いではないか。

思ふに酒屋だ、大塚のお宅と趣が違ひませう、お出入が大したものだぜ。まづ米屋、油屋、豆腐屋、仕出屋、牛屋、酒屋が二軒で、肴屋が三軒だ。

引越して間もないが、すべてむかうから通帳を持

込む、と言ふお勝手向だよ。まあ／＼／＼、まあさ、口惜くば勉強しろと、元氣なり。

此方は浴衣を見てインキを思ひ、インキに因りて怪を思ひ、怪に因りて、家賃を思ひ、待て／＼、格外に易いから、此處を附込んで驚かさうといふ、怪の魂膽我輩にありとは知らず。ばあやは何うしたらうと言ひながら立つて行きたり。

この隙にトそつと出て、次の室には學校へ行く人居て、赤インキ持ちたるを承知なれば、手早く爪に染めて引返し、手洗水で濡したあとを、べたりと手拭になすつて置く。

扨てこの手水鉢の手拭の眞白で新らしいのと、臺所の板の間を草履なしの足袋で歩いて裏を汚さぬと、湯の熱いのと、茶碗の大きなのと、煎餅に箸をつけて出さぬとが、Aさんの大の自慢なれば、新らしいだけ目に着き易く、座に戻ると吃驚して、手水鉢の手拭に血がついてるぜ。呀と、いつたばかり。

こゝの思入、知らぬ顔が出來ないやうで、誰がこの狂言をするものか。

さあ然うすると眞顔になつて、蓋し盡く何うしたわけだと、專ら不思議がる、暮れかゝる、しよぼ／＼雨の陰氣さ加減。

果は眼の色を變へるから、内々で腹を抱へ、此體を見ながら暗くなつちやあ歸られない、もう歸るよ、何うして饂飩と吃驚が、取りかへになるものか。

恐しい／＼、恐しい事だ、大塚々々／＼つて言ふけれど、まさか白晝こんなぢやあないよ、君と僕とばかりだから　可いやうなものゝ、こゝん處に君がいはゆる、あでやかな者が居て見たまへ、アレといつたぎりそれぎりだ。

ほんとに牛込の御前にも恥ぢだよ、彼處のカラコロと此家の血手拭、くらべものになるんぢやあない、大塚々々／＼ツていふけれど、まさか白晝こんなぢやあないよ。

だからね、家賃も高いわけさ、といくら怯かしても大人しく、まあ待て、あかりの點くまでゝも一所に居ないか。

談話は途絶える、愛想はないが、かういふ時は哲理を考へ得るものだと頻に留むる袂を拂ひ、何うして／＼、これがまた逢魔時にでもならうむのなら、ぽた／＼と手拭から血が落ちまいものでもないよ。

僕は歸る、恐しいことだ、盡く恐しい、專ら不思議だ、蓋し妙と、怱々逃げて出て悠然と立歸り、盡く眞個にした、專ら恐れたらう、蓋し妙。

モウ引越したかも知れないと、二日ばかり過ぎて行つて見ると、好いお天氣の蒼い空、切立の手拭にかけ替はつて、手水鉢も取かへたものと見え、水垢少しもつかざるに、漫々と湛へたる溢るゝばかりの水の中に、いま咲きかゝれる花一杖、牡丹櫻ぞ活けられたる。

【完】